# 「千世の雪」と「千世のゆかり」

## ――貫之集歌の本文異同と貫之の表現――

加藤幸一

## 一、

歌仙家集本『貫之集』の中に、次のような歌がある。

> 延喜十五年十二月、保忠左大辨口左大臣北方被奉五十賀時屏風和歌
>
> (A)我宿の松の木ずゑにすむ鶴は千世の雪かと思ふべら也(正保版本歌仙家集本貫之集・五一)[注1]

ともに千年の齢を保つという松と鶴を詠み込んだ賀の屏風歌である。右の本文によると、一首は、松の木末に止っている鶴を雪に見紛う趣向の歌と解される。ところが、『貫之集』の諸本[注2]を見ると、傍線を施した第四句に次のような異文が認められ、それによると、歌の趣向が大きく変わることになる。

千世の雪かと――千世のゆかりと〈西〉
〈御〉

※〈西〉＝西本願寺本。〈御〉＝宮内庁書陵部蔵(510・12)御所本。

すなわち、西本願寺本、御所本の共通異文「千世のゆかりと」によると、一首は、「鶴は松のことを千年の縁者と思っているようだ。」という松と鶴の縁の深さを強調した歌となるのである。

実のところ、『貫之集』の中には、この歌と類想の一首があり、その歌においても同じような本文異同が認められる。

> (延喜十七年八月宣旨によりて)
>
> (B)千世までの雪かとみれば松風にたぐひてたづの声ぞ聞こゆる(正保版本歌仙家集本貫之集・七四)

諸本を見ると、傍線を施した第二句が、次のように対立している。

雪かとみれば――ゆかりしあれは〈西〉
ゆかりにしあれは〈御〉

(A)の歌と同様に、歌仙家集本系の本文によれば、鶴を雪に見紛う歌となり、西本願寺本・御所本によれば、松と鶴の縁の深さを強調した歌となる。

このような、類想の関係にある二首の歌における酷似した本

文異同は、どのようにして発生したのであろうか。まず、二首の異同を仮名のレベルで比較してみると、次のようになる。

(A)ちよのゆきかと――ちよのゆかりと
(B)ゆきかとみれは――ゆかりしあれは

(A)のばあい、二文字が対立しているにすぎず、いずれかが誤写によって発生したとも考えられよう。けれども、(B)のばあい、四文字にわたって対立しており、誤写の可能性はきわめて低いと考えられる。また、二首の歌に共通して、「ゆき」←→「ゆかり」という語と語のレベルの異同が見られ、本文異同に対応して趣向まで二首の歌で同じように変わるという現象は、とても偶然の結果とは考えられない。やはり、(A)(B)二首ともに、いずれかの本文が意図的な改変によって生まれてきたと考えるべきであろう。

「千世の雪」と「千世のゆかり」、「千世までの雪」と「千世までのゆかり」、いったい、いずれが貫之の意図を伝えた本文なのであろうか。以下、二首の歌それぞれの文脈、および、貫之表現の特徴という二つの視点からこの問題を解明し、『貫之集』の本文と貫之表現の特徴の関係について私見を述べる。

## 二、

まず、二首の歌の用語、文脈に目を向けて、いずれの本文が本来の形であるのか考えることとしよう。

(A)我宿の松の木ずゑにすむ鶴は千世の雪かと思ふべら也（正保版本歌仙家集本）
〈西〉〈御〉
千世のゆかりと

右の一首を歌仙家集本系、西本願寺本・御所本それぞれの本文によって解釈してみるとどうなるであろうか。

正保版本を底本とする木村正中氏の新潮日本古典集成『土佐日記　貫之集』[注3]は、次のような通釈を示している。

私の家の松の木ずえに止っている鶴を見ると、千代も変らぬ雪かと見紛うようだ。

傍線を施したように、「鶴は」の「は」を「を」の意に、「思ふべらなり」を「見紛うようだ」と訳している。穏当な解釈のように見受けられるけれども、この通釈には、鶴を雪と見紛うのは誰であるのか、助動詞「べらなり」は何を推量しているのか明確でない憾みがある。その点、香川景樹の『貫之集注』は、同じく「千世の雪かと」の本文によりながらも、次のようにきわめて明解である。

このわが宿の松の末にいとしろうむれゐる鶴は時しもわかぬものなれば、千世もきえせぬ雪なめりとたれも思ひまがふべきぞと也。[注4]

傍線を施したように、鶴を雪に見紛うのは遠くから鶴を見る人々であることがはっきりと示されており、「べらなり」についても詠み手が鶴を見る人々の思いを推量していることが明らかである。

一方、西本願寺本・御所本によると、「鶴は」の「は」は「思ふ」の主語を提示し、「べらなり」は詠み手が鶴の思いを推量したものと解され、一首は、次のように通釈できよう。

わが宿の松の木ずえに止っている鶴は、松のことを千年の縁者と思っているようだ。

このように、(A)の歌はいずれの本文によっても解釈できるように見られる。しかし、この歌に詠み込まれている推量の助動詞「べらなり」の用法に注目すると、歌仙家集本系の本文には難点があり、木村氏の古典集成や景樹の『貫之集注』のようには解釈できないことがわかってくる。

すでに述べたとおり、歌仙家集本系の本文によると、一首は鶴を雪と見紛う趣向の歌となり、「鶴は」の「は」は「思ふ」の目的語を提示した係助詞、「べらなり」は〝鶴を見る人々〟の思いを推量した助動詞と解されよう。ただし、一首全体を見渡しても「べらなり」によって推量される〝鶴を見る人々〟は明示されていない。ところが、当該歌と同様に「――は～べらなり」という形を備えた歌々を見てゆくと、「べらなり」によって推量される対象は、係助詞「は」によって提示されているばあいが多いのである。たとえば、次のごとくである。

ア、山高み見つつわが来し桜花風は心にまかすべらなり（古今集[注5]・八七・貫之）

イ、秋の夜のあかぬ別れをたなばたは経緯にこそ思ふべらなれ（後撰集・二四七・躬恒）

ウ、花もみな散りぬる宿は行く春のふるさととこそなりぬべらなれ（拾遺集・七七・貫之）

エ、秋すぎて残れる菊は神無月雲をわけてぞ匂ふべらなる（延喜廿一～二年初冬内裏菊合[注6]・醍醐天皇）

オ、秋の田と世の中をさへわがごとくかりにも人は思ふべらなり（貫之集[注7]Ⅰ・二三三）

カ、紫の一本菊はよろづよを武蔵野にこそ頼むべらなれ（兼輔集Ⅰ・五八）

キ、久方の天つ空にも住まなくに人はよそにぞ思ふべらなる（元方集・三）

ク、玉くしげふたむら山の月影はよろづ代をこそ照らすべらなれ（兼盛集Ⅰ・六四）

いずれも、係助詞「は」は、「べらなり」が接続している動詞の主語を提示しており、「べらなり」は、「は」が提示した名詞の状態を推量している。たとえば、アの歌は、「風」が心のままに花を散らしている状態を推量しており、イの歌は、「たなばた」が「経緯に」つまりあれこれと思い悩んでいる様子を推量しているのである。貫之前後の勅撰集、歌合、私家集を調査したところ、「――は～べらなり」という形を備えた歌は四五例にのぼり、そのうち右のような例は四二例に達する。わずかに残る三例が、「は」を「を」の意に解すべき例、つまり「べらなり」が接続している動詞の目的語を提示していると解すべき例である。それらは、次のとおりである。

ケ、あやめ草根長きとれば沢水の深き心は知りぬべらなり（貫之集Ⅰ・二二七）

コ、年ごとにあかぬ別れはたなばたのあらぬ人さへなげくべらなり（延喜十六年七月七日庚申亭子院殿上人歌合）

サ、住吉の岸に波立つ松もみな千年は君にゆづるべらなり（兼澄集Ⅱ・一一六）

これらのうち、コとサの二例については、○を施したように、「べらなり」によって推量される対象が歌の中に示されており、注意される。「べらなり」の用法については、さらに検討する必

要があるけれども、推量される対象が歌の中に示されていることが多く[注8]、対象の状態を推量するのが根本的用法と考えられる。

このような傾向を勘案すると、(A)の歌についても、「べらなり」によって推量されているのは、明示されていない〝鶴を見る人々〟の思いではなく、係助詞「は」によって明示されている「鶴」の思いと考えるのが穏当ではないだろうか。このことをふまえて、歌仙家集本系の本文「我宿の松の木ずゑにすむ鶴は千世の雪かと思ふべらなり」によって解釈すると、

わが宿の松の木ずえに止っている鶴は、(自らのことを)千年の雪かと思っているようだ。

となり、「鶴が自分のことを雪と思う」というきわめて不可解な歌となってしまう。これに対して、西本願寺本・御所本の「我宿の松の木ずえにすむ鶴は千世のゆかりと思ふべらなり」によると

わが宿の松の木ずえに止っている鶴は、(松のことを)千年の縁者と思っているようだ。

となり、詠み手が鶴の思いを推量した歌として自然な解釈が得られるのである。以上の考察から、「――鶴は～と思ふべらなり」という文脈に適合するのは、西本願寺本・御所本の本文「千世のゆかりと」であると言うことができよう。

では、(B)の歌についてはどうであろうか。

(B)千世までの雪かとみれば〈御〉ゆかりにしれれは〈西〉ゆかりしあれは松風にたぐひてたづの声ぞ聞こゆる（正保版本歌仙家集本）

正保版本を底本とする木村正中氏の新潮日本古典集成は、右の一首を、

松に置く千代までの雪かと思って見たら、雪のように白い鶴の風に合わせて鳴く声が聞えた。

と通釈しており、(A)の歌と同様に鶴を雪に見紛う趣向の歌という理解である。景樹の『貫之集注』も、歌仙家集本系の本文によって、

うちわたしたる松のうへに鶴のいとしろくむれゐるさまなるべし。上に「千世雪かとおもふべらなり」といへるに同じ心ばへにて、心は明也。

と解しており、木村氏と同様の理解と言えよう。一方、西本願寺本・御所本によると、一首は、

松と鶴は千年までの縁があるので、松風の音と一緒になって鶴の声が聞こえてくる。

と解され、千年の齢を保つ松と鶴の縁の深さを強調した歌となる。

このように、いずれの本文によっても解釈は可能であり、とくに語法上の問題もない。ただし、「松風にたぐひてたづの」とあるように「たぐふ」ということばが詠み込まれている点は注意される。二つの物が相添う、連れ添う意の「たぐふ」は、鶴を雪と見た「千世までの雪かとみれば」よりも、松と鶴の縁の深さを強調した「千世までのゆかりしあれば」とむすびつくのではないだろうか。

以上見てきたとおり、二首の歌の用語・文脈に着目するかぎ

り、(A)(B)いずれの歌においても、西本願寺本・御所本の本文が優位にあると考えられるのである。

## 三、

それでは、貫之表現の特徴という視点から、「千世の雪かと」―「千世のゆかりと」、「千世までの雪かとみれば」―「千世までのゆかりしあれば」という本文異同を見るとどうであろうか。はたして、いずれの形が貫之の歌としてふさわしいのであろうか。

### (1)

すでに述べたとおり、歌仙家集本系の「千世の雪かと」および「千世までの雪かとみれば」によると、いずれの歌も松に止まる鶴を雪と見紛う趣向となり、西本願寺本・御所本の「千世のゆかりと」および「千世までのゆかり（に）しあれば」によると、松と鶴を千年の縁者と見るという趣向になる。

現存する貫之の歌々を見渡すと、鶴を雪に、雪を鶴に見紛うという歌を三例指摘することができる。

ア、むれてをる葦辺のたづを忘れつつ水にも消えぬ雪かとぞ見る（貫之集Ⅰ・三八六）

イ、よそなれば汀に立てるあしたづを浪か雪かとわきぞかねつる（同・四五八）

ウ、松が枝に鶴かと見ゆる白雪はつもれる年のしるしなりけり（同・三六五）

アとイの二首は、水辺の鶴を雪と見ているが、ウは松に積った雪を鶴と見て慶賀の意をあらわしており、歌仙家集本系によったばあいの(A)(B)二首と酷似した趣向の歌である。これらのような鶴を雪に、雪を鶴に見紛う趣向の歌は、同時代の他の歌人には見出し難く、貫之に特有のものと言うことができる。このような歌々の存在を考慮すれば、歌仙家集本系の形が貫之の歌としてふさわしいことになろう。

ところが、貫之の歌々を見てゆくと、西本願寺本・御所本のように松と鶴を千年の縁者とした歌も見出し得るのである。

(C)見渡せば松のうれごとに住む鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる（土佐日記[注9]）

土佐からの帰途、松に飛び交う鶴を見て「船人」つまり貫之が詠んだ歌で、「鶴は松のことを千年の仲間と思っているようだ。」と推し測っている。傍線を施したように「千代のどち」という表現も見られ、(A)の歌の西本願寺本・御所本の形に酷似した歌と言えよう。また、歌仙家集本系の諸本には、次のような歌がある。

松が枝にふりしく雪をあしたづのもと色かへぬ松にざりける（正保版本・二七八）

この歌、右の本文のままでは解釈することが難しい。ところが、西本願寺本・御所本で同じ箇所を見ると、

(D)まつがえにふりしくゆきをあしたづのちよのゆかりにふる（御）かとぞみる（西本願寺本・一六三）

(D′)よのなかにひさしきものはゆきのうちにもといろかへぬ松にぞありける（一六四）

とあり、この形なら、(D)、(D′)いずれの歌も解釈が可能である。点線部を辿ると、歌仙家集本系の本文は、(D)の上の句に誤って

(D′)の下の句を続けた形であることがわかる。注目されるのは(D)の歌で、「松に積った雪を葦鶴が千年の緑で飛んで来たと見る」という内容になっており、しかも「千世のゆかり」という表現も見られるのである。このような松と鶴を縁者と見るという趣向は、当時の屏風歌に多く詠まれた松と鶴というとり合わせを強く意識することによって生まれて来たものと考えられる。けれども、他の歌人の松と鶴を詠んだ歌々、

万代を松にぞ君をいはひつる千とせのかげに住まむと思へば（古今集・三五六・素性）

高砂の松に住む鶴冬来れば尾上の霜や置きまさるらむ（拾遺集・二三七・元輔）

あしたづのむれゐる末の松山はいくそかさねの千とせなるらむ（兼盛集Ⅰ・六七）

鶴も住み松も生ひたるこゆるぎの磯の海人さへ千代をこそ祈れ（能宣集Ⅰ・四七七）

などを見ても同様な趣向の歌は見出すことができず、やはり貫之に特有の趣向と言うことができる。したがって、(C)(D)二首の歌の存在を考慮すると、西本願寺本・御所本の形が貫之の歌としてふさわしいことになろう。

このように、鶴を雪と見紛う、松と鶴を縁者と見るといった一首全体の趣向に注目して用例を探ると、歌仙家集本系、西本願寺本・御所本いずれの形も貫之の歌としてふさわしいことになる。しかし、一首全体の趣向だけではなく、「千世の雪」「千世のゆかり」、「千世までの雪」「千世までのゆかり」という表現にも目を向けて用例を探るとどうであろうか。

すでにあげた例を見るとわかるように、貫之は、松と鶴を詠んだ歌の中に、「千世のどち」「千世のゆかり」という表現を一例ずつ残している。しかも、いずれの表現も、同時代の他の歌人には見出すことができず、貫之独自の表現と言うことができる。ところが、「千世の雪」「千世までの雪」については、貫之にも、同時代の他の歌人にも全く用例がない。「千世のゆかり」「千世までのゆかり」は、松と鶴がともに千年の齢を保つことに注目して生まれて来た表現として容易に理解できる。また、「千世の雪」「千世までの雪」も、『貫之集注』が、「屏風の絵のうごかぬかたにつき、又、鶴の千世にも思ひよせたるなり。」と述べるように、鶴が千年の齢を保つことによる表現と見られ、予祝の表現として成り立ち得るであろう。[注10] しかし、貫之にも同時代の他の歌人にも全く例がないとなれば、貫之に例があり、しかも貫之独自の表現でもある「千世のゆかり」「千世までのゆかり」が、貫之の表現としてふさわしいことになろう。

このように、一首全体の趣向だけでなく、「千世の雪」「千世のゆかり」という表現にも目を向けて用例を探ってみると、西本願寺本・御所本の本文が貫之の歌としてふさわしい形と考えられるのである。

(2)

また、西本願寺本・御所本の形は、貫之に特徴的な趣向とさらに深くかかわっているようである。

貫之は、松と鶴を詠んだ歌のほかにも、二つの景物を縁ある人間のようにむすびつけた歌を残している。

(E)ゆかりとも聞こえぬものを山吹のかはづの声ににほひける

かな（貫之集Ⅰ・二五四）

(F)年ごとにきつつ声する郭公花橘や妻となるらむ（同・三四四）

(G)雪ふればうとき物なく草も木もひとつゆかりになりぬべらなり（同・三一五）

(H)立てば立つゐればまたゐる吹く風と波とは思ふどちにやあるらむ（土佐日記）

いずれも、傍線を施したように、「ゆかり」「妻」「どち」といったことばが詠み込まれ、二つの景物が縁ある人間のようにむすびつけられている。(E)の歌は、小町谷照彦氏[注11]が指摘するように、「ゆかりとも聞こえぬものを」と「山吹」と「蛙」の関係を否定してはいるものの、「ゆかり」ということばを詠み込むことによって「蛙」が鳴くと「山吹」が咲くという両者の深い関係を強調している。また、(F)は、「郭公が毎年橘の枝で鳴くのは、花橘が妻となったからか」と「郭公」と「花橘」をむすびつけている。さらに、(G)は、雪によって真っ白になった「草」と「木」を「ひとつゆかり」になったようだと詠み、(H)は、動きを共にする「風」と「波」を「思ふどち」なのかと推し測っているのである。

(E)の歌は、当時類型化していた〝山吹と蛙〟というとり合わせを強く意識して詠まれたものと考えられる。けれども、他の歌人の〝山吹と蛙〟を詠み込んだ歌々、

蛙鳴く井手の山吹散りにけり花の盛りに逢はましものを（古今集・一二五・読人不知）

都人来ても折らなむ蛙鳴く県の井戸の山吹の花（後撰集・一〇四・橘公平女）

しのびかね鳴きて蛙の惜しむをも知らずうつろふ山吹の花（同・一二二・読人不知）

あしびきの山吹の花ちりにけりゐでのかはづはいまやなくらむ（新古今集・一六二・興風）

などを見ても、二つの景物を〝ゆかり〟としてむすびつけた歌は見出せない。また、(F)の歌も、〝橘と郭公〟というとり合わせを意識していると考えられる。しかし、他の歌人の〝橘と郭公〟を詠んだ歌々、

けさ来鳴きいまだ旅なる郭公花橘に宿はからなむ（古今集・一四一・読人不知）

やどりせし花橘も枯れなくになど郭公声絶えぬらむ（同・一五五・千里）

色変えぬ花橘に郭公千代をならせる声聞こゆなり（後撰集・一八六・読人不知）

郭公などか来鳴かぬわが宿の花橘の実になるまでに（躬恒集Ⅰ・一七九）

などを見ても、花橘を郭公の妻と見た歌は見出せないのである。(E)から(H)のような、二つの景物の間の何らかの関係に着目し、本来無心な二つの景物を縁ある人間同士のようにむすびつけるという趣向は、少し時代が下ると、

山里の夏の垣根はおぼつかな雲のゆかりに見ゆる卯の花（順集Ⅱ・九二）

声聞けば同じゆかりの虫なれやひぐらしにこそ蟬も鳴きけれ（重之集・二五六）

色色に薄くも濃くも置きわくる露と花との仲のゆかしさ（兼澄集Ⅱ・五）

うとからでかかれる藤の花ながら松に心はたがはざらなむ（中務集Ⅰ・五四）

などと散見するようになるけれども、貫之と同時代の歌人の歌には見出すことができない。したがって、本来無心な二つの景物を縁ある人間同士のようにむすびつけるという趣向は、貫之に特徴的なものと言うことができよう。

松と鶴がともに千年の齢を保つことに着目し、両者を〝ゆかり〟としてむすびつけた西本願寺本・御所本の形は、右に見たような貫之に特徴的な趣向と合致するのである。

さらに、西本願寺本・御所本の形は、次のような貫之の歌々とも無縁ではないと思われる。

(1)松の音琴にしらぶる山風は滝の糸をやすげてひくらむ（貫之集Ⅰ・九四）

(2)流れくるもみぢ葉見れば唐錦滝の糸して織れるなりけり（同・一〇三）

(3)青柳の糸よりかくる春しもぞ乱れて花のほころびにける（古今集・二六）

(4)秋の野の千種の花は女郎花まじりて織れる錦なりけり（貫之集Ⅰ・三四六）

(5)秋の野の萩の錦は女郎花立ちまじりつつ織れるなりけり（同・四五四）

(6)秋来れば機織る虫のあるなへに唐錦にも見ゆる野辺かな（同・三五九）

いずれも、傍線を施した二つあるいは三つの景物が、比喩や縁語といった表現技巧を媒介として緊密にむすびつけられている。たとえば、(1)の歌は、「松の音」を琴の音に喩え、「滝」を琴の糸に、「山風」をその弾き手に喩えて三つの景物をことばの世界で関係づけている。また、(2)は、滝を流れる「もみぢ葉」を唐錦に、「滝」をその織り糸に喩えて二つの景物をむすびつけている。さらに、(3)は、「青柳」を糸に喩え、一首全体を糸の縁語で構成することによって、「青柳が糸を縒って懸けて待ちかまえているときに、その糸で縫ってくれと言はんばかりに花がほころぶ」と、無心な「青柳」と「花」を、しめし合わせた人間のように表現しているのである。同様な趣向の歌は、同時代の他の歌人の歌にも、

琴の音に響きかよへる松風はしらべても鳴く蟬の声かな（寛平御時后宮歌合・作者未詳）

秋風にほころびぬらし藤袴つづりさせてふきりぎりす鳴く（古今集・一〇二〇・在原棟梁）

青柳の糸目も見えず春ごとに花の錦を誰か織るらむ（躬恒集Ⅳ・二二六）

秋風に散るもみぢ葉は女郎花宿に織り敷く錦なりけり（後撰集・四一〇・読人不知）

などと散見するけれども、貫之ほどまとまった数の用例を残している歌人はいない。したがって、比喩や縁語といった表現技巧を媒介として二つ以上の景物をむすびつけてゆくという趣向は、貫之に特徴的なものと言うことできよう。

本来無心な松と鶴を縁ある人間のようにむすびつけた(A)(B)二

首の西本願寺本・御所本の形は、表現技巧を媒介としているか否かという違いこそあれ、ことばの世界で二つの景物をむすびつけているという点において、右に見たような貫之の歌々とも無縁ではないと考えられるのである。

以上見てきたように、(A)(B)二首の歌の西本願寺本・御所本の本文は、貫之に特徴的な趣向と深くかかわっており、まさに貫之の歌としてふさわしい形と言うことができよう。

## 四、

以上、『貫之集』に収められた二首の歌の本文異同を、それぞれの歌の文脈、貫之表現の特徴という二つの視点から検討してきた。その結果、(A)(B)いずれの歌においても、歌仙家集本系よりも西本願寺本・御所本の本文が、文脈に適合し、しかも貫之表現の特徴とより深くかかわっていることがわかったのである。さらに、二首の歌の、『古今和歌六帖』『金葉集初度本』といった他文献における様相[注12]を見ても、西本願寺本・御所本の「千世のゆかりと」「千世までのゆかり（に）しあれば」が優位にある。したがって、(A)(B)ともに西本願寺本・御所本の本文「千世のゆかりと」「千世までのゆかり（に）しあれば」が本来の形、すなわち貫之の意図を伝えた本文と判断して狂いはないと思われる。

歌仙家集本系の本文を底本とする景樹の『貫之集注』は、(A)の歌の西本願寺本・御所本の本文「千世のゆかりと」について、

　こは「千世の雪」といふを心得かねて直したる也。

と述べており、(B)の歌の「千世までのゆかり（に）しあれば」については、

　いずれもうつしみだれたるなるべし。

と指摘している。また、木村正中氏の新潮日本古典集成も、『土佐日記』の「見渡せば松のうれごとに住む鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる」の頭注において、(A)の歌との関係にふれ、次のように述べている。

　『貫之集』にきわめて近い類歌（↓五一）があり、おそらくその旧作を使ったのであろう。歌仙家集本（底本）『貫之集』に下句「千代の雪かと思ふべらなり」とあるのを、雪を除いて詠み変えたと思われる。西本（稿者注、西本願寺本）が同歌を「千代のゆかりと」とするのは、『土佐日記』の影響か。

つまり、(A)の歌における西本願寺本の「千世のゆかりと」が、『土佐日記』の歌によって改変された本文であると指摘しているのである。しかし、本稿の考察によれば、事実は逆と言うべきであろう。すなわち、歌仙家集本系の「千世の雪かと」および「千世までの雪かと見れば」の方が、すでに引いた松の雪を鶴と見た、

　松が枝に鶴かと見ゆる白雪はつもれる年のしるしなりけり
　（貫之集Ⅰ・三六五）

などを参考として改変された本文なのではあるまいか。

歌仙家集本、西本願寺本、御所本という『貫之集』の三系統は、歌の配列に共通する部分が多いことなどから、共通の祖本から派生してきたもの[注13]と考えられている。三系統を形態的に見ると、歌仙家集本系統が最も整然とした形を保持しているのに対し、西本願寺本、御所本は、錯簡、脱落といった歌序の乱れ

を共有しており、欠点が多い。それゆえ、底本に選ばれて広く読まれているのは、もっぱら歌仙家集本の系統である。しかし、本文について見ると、西本願寺本、御所本の方が貫之表現の特徴に適合するばあいが少なくないように思われる。本稿は、その一端を示したにすぎないけれども、今後とも表現論の立場からさらに西本願寺本、御所本の本文の性格を検討してゆく必要があろう。

（注）

1、正保四年版本「歌仙家集」（筑波大学付属図書館蔵、ル212・362）による。但し、濁点を施し、『私家集大成中古Ⅰ』所収「貫之Ⅰ」によって歌番号を付した。

2、『貫之集』の現存諸本は、次のように分類されている。

第一類　(1)A、歌仙家集本（正保版本、九巻、八八九首）系。
　　B、陽明文庫蔵本（近・サ・68、九巻、八九二首）系。
　　(2)西本願寺本（一〇巻、七二七首）系。
　　(3)御所本（書陵部蔵510・12、七巻、九三〇首）。

第二類　伝二条為氏筆本（九一首）系。

第三類　伝藤原行成筆貫之集切（断簡一五葉、三九首）。

当該歌(A)および後にあげる(B)は、ともに第一類の三系統に見られ、今回披見し得た伝本は、第一類(1)B系統に属する、陽明文庫蔵（近・サ・68）、陽明文庫蔵（近・212・1）、内閣文庫蔵（201・434）、東海大学蔵桃園文庫本、山形大学蔵（911・1・K8）、および、(2)西本願寺本、(3)御所本である。いずれも、紙焼き写真、複製本によった。

3、昭63・12、新潮社。

4、国文学研究資料館保管（故久松潜一氏寄託）本を底本とする田中登氏編『校訂貫之集』（昭62・2）所収本による。

5、勅撰集の本文は、『新編国歌大観』による。但し、一部表記を改めた箇所がある。

6、歌合の本文は、萩谷朴氏編著『平安朝歌合大成』による。但し、一部表記を改めた箇所がある。

7、私家集の本文は、『私家集大成』による。但し、一部表記を改めた箇所がある。

8、他にも、

春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ乱るべらなれ（古今集・二三）

今いくか春しなければ鶯ものはながめて思ふべらなり（古今集・四二八）

ふるさとを別れて咲ける菊の花旅ながらこそ匂ふべらなれ（後撰集・三九九）

君恋ふる我も久しくなりぬれば袖に涙もふりぬべらなり（拾遺集・九六〇）

など、いずれも推量されている対象が歌の中に明示されている。森野宗明氏「ベラナリといふことば―位相上の問題を主として―」（『国語学』昭35・3）は、「ベラナリは、辞としてのベシが、このようなーラナリというかたちをとることによって詞化して客体性をも兼備し、主体的客体的表現を持つにいたったことばと思われる。〈あることがらが――べき様態においてある〉といった、強く指定するのではもちろんないし、またそうかといって単に推量するものでもない、微妙なニュアンスをただよわせる表現性」を有する語と指摘している。

9、『土佐日記』の本文は、木村正中氏訳注新潮日本古典集成『土佐日記　貫之集』（昭63・12・新潮社）による。

10、但し、「千世の雪」は、「千世もきえせぬ雪」（『貫之集注』）「千代も変らぬ雪」（新潮日本古典集成）などのようにことばを補わねば理解しにくい表現である。

11、「貫之―幻視のことば」（『国文学』昭55・3。のち『古今和歌集と歌ことば表現』平6・10、岩波書店所収）。

12、(A)の歌は、他の文献に次のような形で収められている。

わがやどのまつのこずゑになくたづはちよのゆかりとおもふなるべし（書陵部蔵501・123忠岑集）

わがやどのまつの梢になくたづをちよのゆかりとおもふなりけり（古

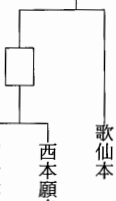
今和歌六帖・二二五四、作者名「貫之、ただみね或本」）
わがやどのまつのこずゑにすむつるはちよのゆかりとおもふべらなり
（金葉集初度本）
我が宿の松のこずゑにすむ鶴は千代の雪かと思ふべらなり（夫木和歌抄・一二五八六、「家集　貫之」）

成立年代の下る『夫木和歌抄』をのぞいてすべて「千世のゆかりと」とある。また、(B)の歌は、次のとおりである。

ちよまでのゆかりしあればまつかぜのたぐひしたづのこゑぞきこゆる
（古今和歌六帖・二二九四、作者名「貫之」）
ちよまでのゆかりにしあればまつかぜにたぐひてたづのこゑきこゆなり（金葉集初度本）

『古今和歌六帖』『夫木和歌抄』は、『新編国歌大観』に、『金葉集初度本』は、増田繁夫他編『金葉集総索引』（昭51・12、清文堂）によった。孤本である『金葉集初度本』をのぞいて、あとの二集については、国文学研究資料館の紙焼写真によって、いくつかの写本を見たが、当該箇所の異同は見られなかった。

13、田中登氏「『御所本貫之集』の本文的価値」（『名古屋大学国語国文学』昭48・5）および『校訂貫之集』は、西本願寺本、御所本が歌序の乱れを共有していることに注目し、三系統の関係を次のようにとらえている。




14、注意すべき例として次のごときがある。

○音にきく井での山吹みつれどもかはづの声はかはらざりけり（正保版本・八八六。第五句〈西〉〈御〉「まじらざりけり」。）
○久方の月影みれば難波がたしほもたかくぞなりぬべらなる（同・二一三。第五句〈御〉「みちぬべらなる」。）
○吹風にさきてはちれど鶯のこえぬは波の花にぞ有ける（同・三七〇。第四句〈御〉「しらぬは波の」。）
○落つもるをとはみゆれど百とせの秋のとまりはあらしなりけり（同・一六九。第二句〈西〉〈御〉「もみぢばみれば」。第五句〈西〉〈御〉「あじろなりけり」。）

いずれも、西本願寺本、御所本の本文は貫之表現の特徴を考えるうえで見逃し難い。

〈付記〉　本稿は、筑波大学国語国文学会第二十回大会（平成八年九月十四日）における口頭発表を補訂したものである。席上ならびに発表後、多くの方々より示教を賜った。ここに記して深謝申しあげる。
（平成八年十一月三日稿）

（かとう　こういち　奥羽大学助教授）